中学校・高等学校国語科教育における漢和辞典活用の指導法（字義）

－ 新学習指導要領「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の観点から －

矢羽野　隆　男

四　天　王　寺　大　学　紀　要
大　　学　　院　第１６号
人文社会学部・教育学部・経営学部　第５５号　2013年３月
短　期　大　学　部　第６３号
（抜刷）

中学校・高等学校国語科教育における漢和辞典活用の指導法（字義）
―新学習指導要領「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の観点から―

矢羽野　隆　男

要旨

平成20年度・21年度に中学校・高等学校の各『学習指導要領』が改定された。〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設され、国語の歴史的・文化的な側面に着目し、国語の文化的な価値を尊重する態度を育むことの重要性が示された。漢字・漢文の学習は、それを不可欠な要素として定着させた国語を内に深く理解すること、そして国語とは異質な外国語として外から国語の特質を照らし出すこと、そうした内外両面の意義をもつものである。漢和辞典はそのような漢字・漢文に関する多くの情報を凝縮した漢字情報の宝庫で、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を学ぶのに適した有用な書である。本稿は、前稿の字形・字音につづき、字義に関する事項を取り上げて、その言語文化的な意義や価値に関心を向けるための漢和辞典活用の指導法、指導の要点を述べた。

はじめに

平成20年度に小学校・中学校の、21年度に高等学校・特別支援学校の各『学習指導要領』が公示された（以下、新『指導要領』）。新『指導要領』では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域に加えて、これまで高等学校だけで示されていた「言語事項」（言語文化に関する内容）が、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕として、小学校・中学校の全学年および高等学校の共通必修科目「国語総合」に各校種を一貫する形で新設された。小学校・中学校においても伝統的な言語文化や国語の特色に対する理解が求められることとなったのである。

漢字は長い国語の歴史を通して国語表記に不可欠な手段となり、日本の言語文化の中核をなす存在となっている。漢和辞典はそんな漢字および漢字文化に関わる情報を凝縮した言わば漢字情報の宝庫で、新設された〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕（以下〔事項〕）を学ぶのに有用な書である。

筆者は前稿において、漢和辞典活用の導入に際する注意点を述べた後、漢字の三要素（形・音・義）のうち「字形」「字音」について、言語文化的な意義や価値に関心を向けるための指導法、指導の要点を述べた。本稿では、内容が多岐にわたり、紙数の関係もあって前稿で言及できなかった「字義」を取り上げる。

一　漢字の字義について

１．漢字の多義性

本義・転義　漢和辞典の親字（見出し字）について、字義（語義）の記された部分を見てみると、たいてい①……、②……、③……などとして、複数の意味が挙げてある。一つの字義しか記さないのは、多くは草木・鳥獣・虫魚・山川・宮室・器物などに属する個別特殊な名称で、使用頻度の高い一般的な字ほど、一字に多くの字義を含みもつ。漢文の読解のため、あるいは熟語における個々の字義を調べるために漢和辞典を引いた時、どの字義を採用すべきかわからず途方に暮れることもあろう。漢字の字義の決定には、その字が現れる文脈や熟語の構造から見当をつけるというかなり高度な推理力が必要となる。それについては後に述べることとして、ここでは漢字が複数の字義をもつにいたった理由を説明する。

漢字には本義と転義とがある [1]。本義とは、原義・初義ともいい、その漢字が本来的にもっていた原初的な意味である。それに対して、転義とは、その漢字が成立した後に本義から転化して増えた意味で、転化の原理に引伸（いんしん）と仮借（かしゃ）とがある。引伸は本義から引き延ばされて別の意味を生じることで、そのようにして生じた意味を引伸義という。いっぽう仮借とは、六書（りくしょ）の仮借と同じく、本義とは関係なく、ただ同音・類似音のつながりでその字を借りて別の意味に用いるようになることで、そのようにして生じた意味を仮借義という。

許慎の『説文解字（せつもんかいじ）』（紀元 100 年成立）は、字形を六書の原理を用いて分析し、字形に基づいて本義を明らかにしようとした最古の字書であった [2]。六書のうち、象形・指事・会意・形声の４つは造字の原理、残る転注・仮借の２つは用字の原理とされる。よって字形を分析して本義を明らかにする際に適用される原理は前の４つということになる [3]。

ここで本義とそこから引伸あるいは仮借の原理で転義が派生するさまとを、いくつかの例を通して確認する [4]。

①服　【本義】舟の横板(ピッタリつく)→引伸→【転義】身につける・従う

②解　【本義】牛を解体する（バラす)→引伸→【転義】ときほぐす・ときあかす

③攷　【本義】うつ・たたく→引伸→【転義】(功績などを)よくかんがえる

④則　【本義】等級にわける→引伸→【転義】規準(のり)、規準に従う（のっとる）

⑤此　【本義】両足を揃えて並ぶ、止まる→引伸→【転義】ここ・これ・この

⑥北　【本義】そむく、背を向け逃げる　→引伸→【転義】背後・北（きた）

⑦之（シ）　【本義】行く→此（シ／これ）の仮借→【転義】ここ・これ・この

⑧考（コウ）　【本義：亡き父】→攷（コウ／かんがえる）の仮借→　【転義】かんがえる

⑨我（ガ）　【本義：のこぎり】→〈ガ／われ〉の仮借→【転義】われ

⑩長（チョウ）　【本義：ながい・ひさしい】→〈チョウ／おさ〉の仮借→【転義】おさ・長官

①～⑥が引伸による転義、⑦～⑩が仮借による転義である。それぞれに少し説明を加えると、

①「服」は、月（ふなづき）と㠯（人に手をぴたりとつける意）との会意字で、舟べりにぴたりと付ける横板が本義。㠯は音符でもある。ぴたりと付けるという意味的な関連から、「身につける」「従う」などの意味が生まれることになった。「服装」「服飾」や「服従」「服役」などの熟語の「服」はこのような引伸義によって構成されるものである。②「解」は、刀と角・牛から成る会意字で、「牛の角や体をバラす」が本義である。バラバラにするという意味上の関連から、「ときほぐす、ときあかす」といった意味が生まれる。「解釈」「解明」「解説」の「解」はこのような引伸義からなる。③「攷」は、手に棒をもって打つ形の 攵（ほくづくり） を構成要素とするように「撃つ」が本義で、そこから、功績などをよく調べる「かんがえる」の意味が派生した。④「則」は、「貨幣の役目をもった貝を品定めして刀で分ける」が原義で、そこから「規準に従う（のっとる）・従うべき規準（のり）」の意味が生まれた。⑤「此」は、止（あし）とヒ（比＝ならぶ）とからなり、「足を揃えて並ぶ・止まる」が本義、そこから止まった位置を指し示す「ここ・これ・この」などの指示語となった。⑥「北」は、人が並ぶ形の「比」と正反対の字で、人が背を向け合っている形で「背く・背を向け逃げる」が本義、そこから日に向かって背後の方角「北」の字義をもつようになった。このように字形に基づく本義が、意味をすこし変化させて異なる意味を生み出していることが見て取れるだろう。

⑦～⑩の仮借による転義にも説明を加える。⑦「之」は、足跡の形で「行く」が本義である。その之（音シ）が、同音のつながりで此（音シ）の「これ」の意味をもつようになった。⑧「考」は、『説文』に「考は老なり」とあるように、老いて「亡くなった父」が原義であったが、同じコウの音をもつ関係で攷の「かんがえる」の意味をもつようになった。⑨「我」は、甲骨・金文によると「のこぎり」の形であるが、ガという音のつながりで第一人称の「われ」を表す字に用いられることになり、原義は廃れてしまった。⑩「長」は、許慎が六書の仮借の例で挙げているように、「久遠」の意味をもつ長が、チョウという音のつながりで、県のおさ・長官を意味する字として用いられるようになったものである。仮借は同音・類似音との関わりで字に別の意味を持たせる当て字的な用法で、もともと恣意的な面があるが、それが広く用いられて定着した結果、⑦「之」、⑧「考」、⑨「我」など、本義よりも仮借義の方が使用頻度の高くなったものも少なくない。

破読字　これまでたびたび漢字は三要素（形・音・義）から成ると述べてきたが、字形に異体字[5]があり、字義に本義・転義があるように、字音も漢字一字に一音とは限らず、複数の音をもつものがある。日本に伝来した漢字音に呉音・漢音・唐音・慣用音など複数の字音があるという意味ではなく、中国における漢字音に複数あるものがあるという意味である。このような「異なる意味を読み分ける複数の字音をもつ字」を破読字といい、そのように読み分けられた字音のうち主たる字音ではない字音を破読という。

これは中国語学習者には常識に属する現象であるが、現代中国語での例を挙げると、「好」字の場合、A「よい、すばらしい」の意味では hǎo と第三声（低く抑えるトーン）で発音し、B「すきだ、このむ」の意味では hào と第四声（上から下へさげるトーン）で発音する。この「好」字の場合、日本漢字音では、Aの意味での「好評 **コウ**ヒョウ」「良好 リョウ**コウ**」も、Bの意味での「好色 **コウ**ショク」「愛好 アイ**コウ**」も、ともに「コウ」という音であり、破読に

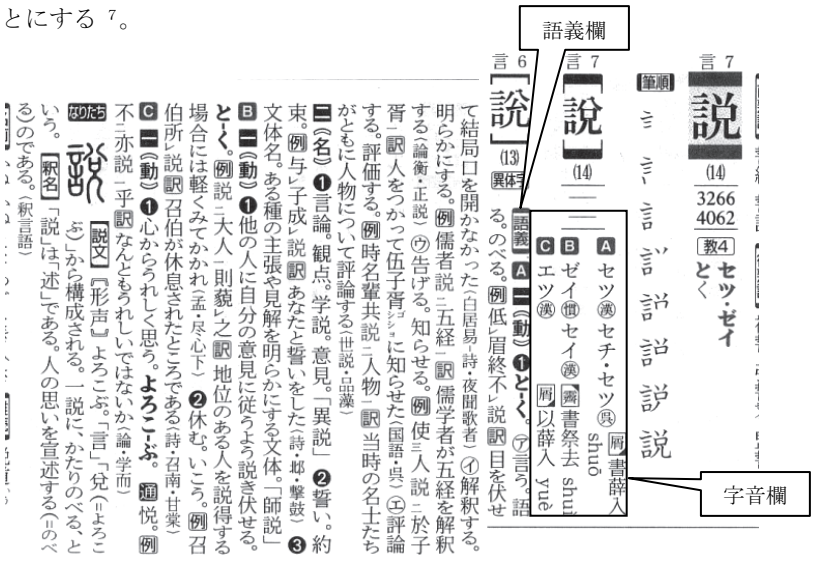
よる差異は見えなくなっている。しかし、「楽」字の場合、A「音の芸術＝音楽」の意味では yuè 、B「たのしい」の意味では lè とまったく発音を異にし、日本漢字音もこの差異を受けて、Aは「楽器 **ガク**（ガッ）キ」「音楽オン**ガク**」、Bは「楽園 **ラク**エン」「快楽カイ**ラク**」と読み分ける。

このような破読字の「字音；意味；用例」をいくつか挙げておく。「同じ字なのになぜ読み分けるの？」という疑問に対し、単に「この場合はそう読むのだ」というのではなく、前稿で述べた日本漢字音の違いのほか、〈漢字によっては破読といって意味の違いによって読みを区別するものもある〉〈漢和辞典には書いてある〉と指導することで、漢和辞典の活用方法とともに漢字の知識を伝えることができよう。

読（**トク・ドク**〈dú〉;よむ・よみ；読書・朗読／**トウ**〈dòu〉；句の中の区切り；読点）
出（**シュツ**〈chū〉；でる・だす；出入・脱出／**スイ**〈chuì〉；だす；出納・出師）
悪（**アク**〈è〉；わるい；悪人・粗悪／**オ**〈wù〉；にくむ・いやな；悪寒・嫌悪）
説（**セツ**〈shuō〉；とく；説明・解説／**ゼイ**〈shuì〉；ときふせる；説客・遊説）
率（**ソツ**〈shuài〉；ひきいる；率先・引率／**リツ**〈lǜ〉；わりあい；比率・率分）
易（**イ**〈yì〉；やさしい；易行・平易／**エキ**〈yì〉[6]；かえる；易俗・交易）

２．漢和辞典の記載に即して

破読字の場合　漢和辞典を参照させる場合のことを考え、漢和辞典の記載の実例に即して説明する。漢和辞典の親字の説明では、語義欄において先の本義・転義が①……、②……、③……などと列挙されるが、破読字においては〈字音の違いによって異なる語義〉に対してさらに上位の分類を施してある。ここでは先にも触れた「説」字を例に挙げる。なお、この破読の区別は、中学生向けの辞書では記述が簡略でかえって説明しにくいので、高校生・一般向けの辞書によることにする[7]。



〈図１「説」字の親字説明〉

先ず字音欄を見ると、A B Cと三つに分類し、それぞれの分類において日本漢字音をカタカナで表示している。同時に同じ分類内で呉音・漢音・慣用音などの違いも表示している。

次に語義欄を見ると、まず大きくA B Cに分類され、そして、それぞれの下位には、

A≪動≫①**と - く**。≪名≫①言論。学説。意見。②誓い。約束。③文体名。
B≪動≫①他の人に自分の意見に従うよう説き伏せる。**と - く**。②休む。いこう。
C≪動≫①心からうれしく思う。**よろこ - ぶ**。

というように、各字音によって表わされる字義が順に並べられている。因みに、この辞書は字義を≪動≫≪名≫などのように品詞別に挙げるのが特徴で、どの辞書もそうとは限らない。

字義記載の順序　破読についてはこれで措き、字義の話に戻る。親字には複数の字義をもつものが少なくないが、そもそもそれらの複数の字義は字義欄においてどのような順序で並べられているのか。編者の意図によって「使いやすさ」「現代日本における必要度」など独自の原理で排列するものもあるが、伝統的には〈本義から転義へ〉の順である[8]。先ずは生徒の使う辞書がどのような配列になっているか、凡例を確認させることが必要である。

一般向けの漢和辞典の多くは〈本義から転義へ〉の順であるから、「漢字の成り立ち」も読み、字義欄の配列を通して〈本義からどのように多義が派生していったのか〉を考えてみると、漢字の本質を把握した上での効果的な応用が可能となる。日本の古典語彙の場合も、古語辞典には1語に多くの語義が並んでいるが、実は基本義が場面によって変化して多数の訳語となるだけのことだから、基本義をしっかり把握した上で状況に応じてぴったりの意味を見つけ出すことができれば効率的である[9]。漢字も同様に、漢和辞典を引く際に〈本義を押さえて転義に及ぶ〉という見方を意識して継続すれば、一字の字義から熟語における意味まで漢字・漢語の効率的な理解につながろう。

韻目　先に漢和辞典の字音欄の実例A B Cを見たが、それぞれの日本漢字音の下にある記号等について触れておく。この四角で囲まれた屑 霽 屑などの漢字は韻目という。韻目とは、「韻」すなわち漢字音の音節の後半（声調を含めた韻母）[10]いわば〈音の韻（ひび）き〉を同じくする字でグループを作り、そのグループに属する一字を代表として掲げたものである。□の四隅の黒い印は四声といって四種のトーン――左下は平声（現代中国語の第1・2声 平らでのびやかな音）、左上は上声（同第3声 低く抑える音）、右上は去声（同第4声 上から下へ下げる音）、右下は入声（現代標準音では消滅した、韻尾が-p・-t・-kで終わる音）――を表す。詩作では中古音韻（隋・唐時代の音韻）が規準となるので、中古音韻を伝える『広韻』（11 世紀）やそれを簡略化した『平水新刊韻略』（13 世紀）の韻目が掲げられる。これを見ることで押韻しているかどうかを確かめることができる。

例えば、李白「静夜思」について、「牀前看月**光**、疑是地上**霜**。挙頭望山**月**、低頭思故**郷**。」の各句末の字―「光」「霜」「月」「郷」のそれぞれの韻目を調べると、転句「月」の韻目が月（たまたま目当ての字と韻の代表字とが一致）であるのに対し、起・承・結句の「光」「霜」「郷」はみな陽になっている。すなわち「光」「霜」「郷」はみな同じ韻のグループに属する字で、互いに押韻することがわかる。この詩の場合、個々の字を日本漢字音で読んでも、「光 kou」「霜

sou」「月 getsu」「郷 kyou」と、「月」だけ異なることがわかる。しかし、李白「送友人」の場合はさほど明瞭ではない。「青山横北郭、白水遶東**城**。此地一為別、弧蓬万里**征**。浮雲遊子意、落日故人**情**。揮手自茲去、蕭蕭班馬**鳴**。」について、韻字の「城」「征」「情」「鳴」を日本漢字音で不用意に読むと韻が異なるように思われる。しかし、各字の韻目を調べてみると、確かにみな庚となっており、押韻していることが確かめられる。漢詩教材の学習で詩型・押韻・対句は必ず抑える基礎的な事項であるが、実際に押韻しているかどうか自分で漢和辞典を用いて確認させることができるのである。

付言すると、呉音は漢字全体を覆っていないので、日本漢字音で韻字を読む場合は、全体を覆う漢音に基づくべきである。上記の「城」「征」「情」「鳴」の日本漢字音について、漢音は㊥、呉音は㊧として示すと、「城 ㊥セイ　㊧ジャウ」「征 ㊥セイ」「情 ㊥セイ　㊧ジャウ」「鳴 ㊥メイ　㊧ミャウ」となる。すべてを漢音で読めば、「城セイ」「征セイ」「情セイ」「鳴メイ」と押韻しているのがよくわかる。不用意に漢音・呉音を交えず、漢音で通して読むべきことがわかろう。

二　和訓について

1．訓の機能と意義

訓と和訓（訓読み）　「訓」という漢字の意味は、難しい字句の意味を易しい言葉で説明するということである。古語の字句を現代語で説明することを「詁」というのと併せて「訓詁（くんこ）」という熟語もある。いっぽう〈国語における訓〉は、漢字の音読みに対する「訓読み」のことで、漢字を日本語に翻訳し、その訳語が漢字の読み方となったものを指す。漢文を日本語に翻訳する訓読（くんどく）を通して、漢字に当てた訳語がしだいに人々の間で共通の読み方として認知され定着するに至ったのである。この〈国語における訓〉という現象を、「訓」という漢字の字義と区別するために「和訓・訓読み」と呼ぶことにする。

和訓を端的に定義すると次のようになる。「漢字すなわち古典中国語の単語（＝漢字）に、日本語で意味を付け、かつそれをそのまま発音としても用いるもの。１．訓＝和語・やまとことばであること、２．意味と発音とを兼ねること、を要件とする[11]。」。

和訓の特徴を知るために、簡単な図式で説明する。

中国語：　（形）山――（音）shān――――（義）mountain・hill

日本語：　（形）山――（音）san／**yama**――（義）mountain・hill／やま

中国語の場合、「山」という字形は shān と発音され、英語でいう「mountain・hill（日本語でいうやま）」といった意味を表す。これに対して、日本語の場合、「山」という字形は、中国語の発音に由来する san という発音がなされ、英語でいう mountain・hill（日本語でいうやま）という意味を表す。そして特徴的なのは、日本語においては、字義をあらわす和語「やま」を「山」という字の発音 yama としても用いることである。つまり和訓・訓読みは、〈和語で表された意味〉と〈発音〉とを兼ねているのである。

我々の言語生活において和訓･訓読みは空気のような存在で､意識せずに親しんでいるため、このように説明しても何が特殊なのか実感できないかもしれない。ここで日本語における英語語彙の場合を例に挙げて比較対照してみよう。

（語形）friend　　（音）フレンド　　（義）ともだち

（字形）友　　（音）ユウ／tomo　　（義）ともだち

英語語彙の場合、「friend」という語は「フレンド」と発音され、日本語でいう「ともだち」という意味を表す。しかしその意味を表す和語を発音としても用いて「friend」という綴りを直接 tomo あるいは tomodati などと読むことはない。「友」という漢字にその意味を表す和語「とも」を発音としても用いて、「友」を直接 tomo と読むのとの間に大きな隔たりがある。

和訓（訓読み）の機能・意義　我々にとって和訓・訓読みは極めて自然な言語現象であるため、その文化的な意義を十分に認識できていないよう思われる。だが、漢字を国語に不可欠な要素として定着させるにいたった要因は和訓・訓読みにこそある。先に「和訓・訓読みは、〈和語で表された意味〉と〈発音〉とを兼ねている」と述べた。よって、訓読みの発音yamaを聞いて「やま」という概念を思い描くことはできる。しかし音読みでは、sanという発音を聞いても、それは意味と結びつかない。単なる音に過ぎないからである [12]。音読みで語の意味を絞り込んで確定するには「san myaku山脈」「san sui山水」などのように熟語化するとか、文脈の中で見当をつけるなど､他の字･他のことばとの関係性といった要素が必要となってくる。国語においては、和訓・訓読みこそが漢字と和語とを概念をともなって密接に結び付ける重要な働きをしているのである。和語と密接に結びついたが故に、表記において内容把握や速読に適した漢字仮名交じり文が発生定着し、新たな概念に対して新しい漢字語彙を作り出すといった創造的な運用も可能となった [13]。

あまり知られていないが、実は東アジアにおいて漢字を使用していた地域、いわゆる漢字文化圏において､訓読みの現象が広く行われているのは日本だけである。漢字伝来の当初は漢字・漢文を音読したが、漢字を用いて和文を記すようになると、早くも 6 世紀には訓読みを用いている。日本人は漢字によって国語を表記表現するに当たって、万葉仮名を用いる一方で、訓読みも用いるなどの工夫を凝らしてきたのである。

訓読みはもともと古代朝鮮で行われたものが日本に伝えられたというが、現在では朝鮮半島やベトナムなどでは特殊な例を除いて行われていない [14]。さらに朝鮮半島やベトナムはハングルやチュー･クォックグーといった表音文字が用いられ､漢字はほとんど使用されていない。朝鮮語・ベトナム語が表音文字による表記に移行しえたのは、それらの言語に訓読みに相当する現象がなく、漢字語彙は音読みによるものであったため、日本語ほどに漢字と言語との密着度が高くなかったためかもしれない。それはともかく、漢字文化圏において日本だけにある訓読みの意義を認識し、訓読みの優れた機能を漢字・漢語の理解に役立てるような教育法・教材の開発を進める必要がある。これについては後に改めて述べる。

２．同訓異字

国語においては、一つの和訓に異なる複数の漢字が該当する。逆に言うと、異なる複数の漢字が同じ一つの和訓で読まれることが普通である。これを同訓異字（あるいは異字同訓）という。この現象は、もともと中国語を表記するために生まれた漢字の特性と国語の特性との間に存する隔たりが生み出したものである。同訓異字の発生の原理を知ることは、漢字との対照によって国語の特性を知り、さらに国語表現において漢字の特性を活かすことにもつながる。

まず漢字について。漢字は「表語文字」といわれるように、基本的に１字が１つの語形を表し（１字が１義しかもたない、という意味ではない）、それは原則として１音節で発音される。様々な異なる意味をもつ語も、１音節で発音される漢字１字に凝縮して表示される [15]。この世のありとあらゆる事物を表す言葉が、それぞれ漢字１字をもつことによって、まさしく漢字の数は五万とあることになったのである。

さて、この世の森羅万象を映しだす漢字は、字形・字義の類似によってグループ（部）に分けることができる（その部を代表する字が部首である）。艸・木・鳥・魚から心・手・見・言など様々な事物の範疇を示すグループに分けられ、さらにその下位において様々な概念が１音節・１語の漢字として所属する。ここで「馬」というグループを、中国最古の字義分類による辞書『爾雅』釈畜篇の記述を例に見てみよう [16]。

騮ソウ：4 本の足の膝上がみな白い馬	騙セン：4 つの蹄（ひづめ）がみな白い馬
騏ケイ：前足がともに白い馬	驤ショウ: 後の右足が白い馬
犀シュ：後の左足が白い馬	騵ゲン：赤毛で腹が白い馬
騊イツ：黒毛で股の白い馬	驠エン：尻の白い馬
駰アン：尾の根元の白い馬	駺ロウ：尾の白い馬

まだまだあるが後は略す。漢字の横にカタカナで日本漢字音を示したが、日本漢字音が２音節でも中国語の漢字音はみな 1 音節である。このように、〈馬〉という大きな範疇の下に、複雑な意味の違いをもつ多くの〈馬関連の語〉が 1 音節・1 字でずらりと並ぶ。馬（類）―馬関連の語（種）という構造から、漢字の表現は〈分類的〉ということができる。

いっぽう日本語はどうか。先の例で見れば、〈馬〉という類概念の下位にある種概念の〈馬関連の語〉を、日本語では〈馬〉という類概念に対して様々な修飾成分―例えば、「4 本の足の膝上がみな白い」とか「前足がともに白い」などを加えることによって表すしかない。「騮」という 1 字・1 音節に凝縮された概念を、日本語では「4 本の足の膝上がみな白い馬」というように言葉を連ねて細かに叙述しなければならない。漢字が〈分類的〉であるのに対し、日本語は〈分析的〉といえる。

漢字は表語文字であるから「騮」字は１つの単語である。しかし日本語の「4 本の足の膝上がみな白い馬」は分析的な叙述であって既に単語ではない。では、日本語における単語を基準にして考えるとどうなるだろうか。やはり単語として成り立つには一定の長さ（短さ）が求められる。日本語の語彙の長さとしては、せいぜい「あししろうま（足白馬）」くらいであろう。すると仮に、〈足の一部でも白い馬〉という意味で「あししろうま」が和訓として成立した場合、

この和訓には先の「驒・騏・騱・驤・犇」などの字が該当することになる。「あししろうま」という和訓における同訓異字である。このように同訓異字は、漢字が複雑な意味をもつ単語を 1 字に凝縮して表現できるのに対して、日本語の単語がかなり粗い意味しか表すことができないために生じる現象である。

以上、同訓異字発生の原理と国語の特性を述べた。国語の単語は漢字に比べて粗い意味しか表すことができない。しかし国語は、和訓によって微妙に意味の異なる多くの漢字と密接に結びついている。国語の単語は、口頭では大づかみな表現しかできなくても、文章ではニュアンスの異なる漢字を使い分けることで陰影に富んだ表現も可能となる。

例えば、「おもう」という和訓に当たる字には、「思・想・念・憶・懐・意」などがある。これらは、

思：あれこれおもいはかる、人をおもいしたう　　想：おもいうかべる、おもいにふける
念：いつも心にかけてわすれない　　憶：いつまでもおぼえていて忘れない
懐：なつかしくおもう　　意：あれこれとおもう、おもわく

など、それぞれに微妙な意味の違いをもつ[17]。

文章表現において、「おもう」の訓にこれらの漢字を当てて表記することで、「20 年後の自分を想(おも)う」「恩師の訓(おし)えを念(おも)う」「月を見て故郷を懐(おも)う」など繊細な感覚を盛り込むことができる。ただ、常用漢字表で「おもう」の訓が認められた字は「思」だけなので、文書の性格や文章の内容に即して柔軟に対応する必要がある。多分に感覚的な用法であるから独善的な使用を避け、使用にはルビを振るかどうかといった気遣いが求められる。なお「同訓異字」の説明は、小型の漢和辞典でも親字の解説や附録に、枠で囲ったり一覧表にしたりして掲載されている。「計る、量る、測る、図る、謀る、諮る」などの書き分けに必要な知識も得られるので、適宜参照できるように注意を向けたい。

３．特殊な訓[18]

国訓　漢字は日本に伝来して以降、長期にわたり国語と接触するにつれ日本独自の展開を見せることとなった。字形においては国字を生み、字音においては慣用音を生んだ[19]。国訓はその字義における同様の現象で、和訓のうち中国での字義から外れて日本独特の意味を持つようになったものを言う。以下に挙げた例でいえば、左が中国における本来の字義、右が日本で生まれた国訓である。

鮎（なまず／あゆ）	柏（ひのき／かしわ）	霞（あさやけ／かすみ）
戻（もとる〈背く〉／もどる）	詣（いたる／もうでる）	諦（あきらか／あきらめ）
詰（といつめる〈詰問する〉/つめる〈詰め込む〉）	儲（たくわえる／もうける）	携（たずさえる／たずさわる）

漢和辞典ではこれら国訓を含めた漢字の日本的な用法を、親字の説明欄に国 日本 日本語用法 日本語での用法といった表示を付して解説している[20]。

熟字訓　漢字は 1 字＝1 語なので、和訓はふつう 1 字に対応して当てられるが、なかに 2 字

以上の漢字で構成される熟語を１語とし、それ全体を覆うようにして和訓を当てることがある。それを熟字訓という。『常用漢字表』では「１字１字の音訓としては挙げにくいもの」を「付表」に掲げてある。漢和辞典でも、親字の解説に難読 付表の読みなどの表示で熟字訓を掲げているものもある。ここでは「付表」から幾つか例を挙げてみる。

あす	明日	えがお	笑顔	かぜ	風邪	かわせ	為替	さつき	五月
しにせ	老舗	だし	山車	たなばた	七夕	なこうど	仲人	なだれ	雪崩
のりと	祝詞	はたち	二十歳	ひより	日和	まじめ	真面目	みやげ	土産
めがね	眼鏡	やまと	大和	やよい	弥生	ゆかた	浴衣	わこうど	若人

これらは基本的に熟語全体を覆って訓が当てられているので、漢字１字ごとに訓を割り当てて、「明日」を「明(あ)」「日(す)」とか、「大和」を「大(やま)」「和(と)」とか、と分けて読むことはできない。古い商家の意味の熟語「老舗（音ロウホ）」に伝統の継承を重んずる意味の「仕似(しに)せ」を訓にあてた「老舗(しにせ)」は、語源からして「老舗」の個々の字義と訓「しにせ」とが対応するものではない。けっして「老(し)」「舗(にせ)」などとすることはできない。「七夕(たなばた)」も、七月七日の夜を意味する「七夕」という熟語に、織女の従事した「棚機(たなはた)（織機の意）」という訓が当てられたものである。「七夕」の字義と訓「たなばた」とは本来は無関係で、これを「七(たな)」「夕(はた)」などと読むのは無理である。

近年、キラキラ・ネームと呼ばれる特殊な名付けで読めない名前が多くなった。「笑顔」の「笑」を「えみ→え」、「仲人」「若人」の「人」を「ひと→と」のように、語源に遡って字義と訓とが対応するならば問題はない。しかし、「七夕(たなばた)」から「七(たな)」、「雪崩(なだれ)」から「雪(な)」、「紫陽花(あじさい)」から「紫(あ)」、「秋桜(コスモス)」から「秋(コスモ)」となると、字義とは無縁の恣意的な読みとなる。言葉や名前は社会性に根差したものであるから、漢字を用いた名前の読み方に社会的な妥当性があるか否かには一定の配慮が求められよう。一般向けの漢和辞典には親字の解説に名付 名前などの表示を設け、これまで名付けに用いられてきた読みを挙げているので参考になる。

４．常用漢字表の訓の問題

常用漢字の音訓　昭和 23 年 2 月の「当用漢字音訓表」によって、法令・公用書・新聞・雑誌および一般社会において使用の認められる漢字の音訓が選定された。当用漢字はそもそも将来の漢字廃止を視野に入れて当座の漢字使用の許容範囲を示したものであったので、「音訓表」も音訓の使用を規制するものであった。よって先に述べたように、「おもう」の訓に対しては、一般社会向けとして「思」が選ばれ、「想・念・憶・懐・意」などを「おもう」と訓(よ)めなくなった。その後、昭和 56〈1981〉年の「常用漢字表」の公布により、〈使用の範囲〉が〈使用の目安〉に変わったものの、音訓使用の規準は「当用漢字音訓表」を踏襲している。よって一般社会向けの文章では、「想」以下の漢字を「おもう」と訓(よ)むには、ふつうルビを振ることとなる。

ところで先に「国語においては、和訓・訓読みこそが漢字と和語とを密接に結び付ける極めて重要な働きをしている」と述べた。しかし、平成 22 年 11 月に内閣告示された改定『常用漢字表』[21]に掲げられた音訓を見ると、訓よりも音の比重が大きい。改定『常用漢字表』の音訓を詳細に見ると次のとおりである。すなわち、常用漢字の総数は 2136 字（昭和 56 年の 1945

字より 191 字増加)、それに付された全ての音訓が 4388 種である。1 字に音訓両方が付される場合があるので字数より音訓の数が多くなる。問題は音訓 4388 種の内訳である。音訓 4388 種のうち、音が 2352、訓が 2036 で、音の方が 316 多いのである。さらに字を中心にみれば、音をもつ字は2059字で全体の96%を占める。それに対して訓をもつ字は全体の62%に止まる[22]。逆に言えば 38%、なんと常用漢字全体の約 4 割弱に当たる 819 字が〈音しかない字〉なのである。

中学校・高等学校での漢字学習は、新『指導要領』で次のように規定されている。中学校では 3 年間で「常用漢字（2136 字）の大体を読むこと」、「〔小学校で学習する漢字 1006 字の〕漢字を書き、文や文章の中で使い慣れること」とされる。また高等学校では、共通必修科目の「国語総合」において「常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字が書けるようになること」とされている[23]。中学校で「大体を読み」、高等学校で「読みに慣れ、主なものが書けるように」とされる常用漢字に〈音しかない字〉が 4 割弱もある。つまり約 4 割が〈字の発音はできても意味を端的に言い表せない字〉〈読めても訓(よ)めない字〉なのである。また小学校 6 年間で学習する教育漢字（学習漢字ともいう）は、中学校で「書け」「使い慣れる」べしとされる字である。これらについても先と同様に音訓の状況を見ておくと、1006 字のうち 283 字が〈音しかない字〉で全体の 28%である。初等教育ゆえ観念的な漢字が少ないためであろう、さすがに 4 割には至らないが、それでも 3 割弱が〈字義を端的に言い表せない字〉なのである。

漢字の音はわかるが訓はわからない、〈読めても訓(よ)めない〉とはどのようなことか。それを実感するために、改定『常用漢字表』のうち五十音のア行にある〈音しかない字〉を列挙してみる。なお後に①～⑥を付したのは教育漢字で（①は 1 年次配当、⑥は 6 年次配当の意味)、54 字のうち 23 字、43%を占める。これらの字の意味をズバリと言い表わせるだろうか。

1. 亜（亞）ア	2. 挨アイ	3. 愛アイ④	4. 圧（壓）アツ⑤	5. 案アン④
6. 以イ④	7. 医（醫）イ③	8. 依 イ	9. 威 イ	10. 為（爲） イ
11. 胃 イ④	12. 尉 イ	13. 椅 イ	14. 彙 イ	15. 意 イ③
16. 維 イ	17. 遺 イ・ユイ⑥	18. 緯 イ	19. 域 イキ⑥	20. 壱（壹）イチ
21. 逸 イツ	22. 咽 イン	23. 姻 イン	24. 員 イン③	25. 院イン③
26. 韻 イン	27. 宇 ウ⑥	28. 鬱 ウツ	29. 英 エイ④	30. 衛 エイ⑤
31. 疫エキ・ヤク	32. 益 エキ⑤	33. 液 エキ⑤	34. 駅（驛）エキ③	35. 悦 エツ
36. 謁 エツ	37. 閲 エツ	38. 怨 エン・オン	39. 宴 エン	40. 媛 エン
41. 援 エン	42. 演 エン⑤	43. 王 オウ①	44. 凹 オウ	45. 央 オウ③
46. 往 オウ⑤	47. 旺 オウ	48. 欧（歐）オウ	49. 翁 オウ	50. 億オク④
51. 憶 オク	52. 臆 オク	53. 乙 オツ	54. 恩 オン⑤	

これらの中には、用法が限定的でそれを用いる熟語が少なく、応用性が低いために、訓を当てる意味に乏しいものや、音で定着しているために訓を当てにくいものもある。たとえば、挨（挨拶）、椅（椅子）、彙（語彙）、央（中央）、欧（欧州・西欧）、億（億兆）、乙（甲乙）などは、国語一般の表記においては（ ）の熟語にしか用いられないであろう。また、医、胃、

駅などは音読みで根付いており、無理に古辞書にみえる「くすし」「くそぶくろ」「うまや」などの訓を当ててはかえって実感から遠ざかり、わかりにくい。

いっぽう、古来用いられてきた訓を当てることで、捉えどころのなかったその字の輪郭が立ち現われ、字義の理解に有用な場合も少なくない。さらにその字を用いた熟語が逐字的に把握され、上滑りでない確かな理解につながる。ひいては、根底のある漢字力により国語全般の読解力・理解力・表現力の向上にもつながろう。ここでは先の〈音しかない字〉のうち教育漢字を例に取って、「漢字」「訓」「熟語（熟語の訓読）」の順に挙げてみる[24]。

漢字	訓	熟語（熟語の訓読）
愛	いつくしむ・おしむ	**愛情**（愛しむ情）　**割愛**（愛しいものを割く）
圧	おす	**圧力**（圧す力）　**圧迫**（圧し迫る）
案	かんがえる	**案件**（案える件）　**提案**（案えを提ぐ）
意	かんがえ、おもう	**意見**（意え見かた）　**決意**（意いを決める）
遺	わすれる、のこす	**遺失**（遺れ失う）　**遺言**（遺した言）
域	さかい、かぎる	**域内**（域の内）　**地域**（地の域られたところ）
員	（人の）かず、（数ある）ひと	**定員**（定められた員）　**委員**（委ねられた員）
英	ひいでる	**英雄**（英でた雄）　**英断**（英でた断め）
衛	まもる	**衛生**（生きるを衛る）　**護衛**（護り衛る）
演	のべる、ひく（ひろげる）	**演技**（技を演べる）　**演習**（〈事を〉演べひろげ習う）
往	いく	**往復**（往き復り）　**既往症**（既に往く症）
恩	めぐみ、いつくしみ	**恩情**（恩しみの情）　**謝恩**（恩みに謝いる）

ここに示した「熟語の訓読」は、熟語の意味を逐語的に理解できる点で有用である。また同時に、基本文型の最も単純な形態である二字熟語を構造的に把握することができ、漢文の入門教材としても適していると考える。この点については次章で改めて取り上げる。

三　熟語

1．なぜ熟語を作るのか

孤立語と膠着語　漢和辞典では親字の形・音・義に関する諸情報に続いて熟語が列挙されている[25]。一般には、親字の諸情報を見るよりも、むしろこの熟語欄で目当ての言葉を探して意味を知るという使い方のほうが多いであろう。この熟語欄の排列は、以前は親字に続く二字目の画数順もあったが、現在ではほとんどが熟語の五十音順になっている。

ところで熟語欄を一見して気付くのは、ほとんどが二字熟語であることだ。なかに三字・四字からなる熟語・人名・書名、さらに字数の多い成句なども含まれるが、ほとんどは二字である。ここでいう熟語とは、「複数の漢字がある意味上の関係性によって結合してできた複合語」

であるが、1 字で 1 語を表せる漢字が、何故これほど多く他の漢字と結合して熟語を作らねばならないのか。

これは中国語という言語の特性による。中国語は言語形態による分類でいえば孤立語に属する。孤立語は、単語の形態は固定して変化せず、文法的な意味は単語の並び方すなわち語順で決まる。いっぽう膠着語に属する日本語は、動詞・形容詞などの用言は語尾が活用変化し、文法的な意味を表すのに「～が、～は、～を、～に」といった助詞が重要なはたらきをする。表現が拙くて要領を得ない国語を「〈て・に・お・は〉がなっていない」と評するのは、国語における助詞の機能の重要さをよく示している。

ここで孤立語の特性を、具体例を通して確認しておきたい。次の 4 種は「我（わたし）」という語を含む文である。「**中国語（漢文）**」、中国語に訓点（返り点、送り仮名）を施した「**漢文訓読文**」、漢文訓読文を日本語の表記に改めた「**書き下し文**」、そして「**英語の格変化**」の順に並べたものである。

	中国語（漢文）	漢文訓読文	書き下し文	英語の格変化
1	**我**愛人。	**我**(ハ) 愛(ス)レ 人(ヲ)	**我（は）**人を愛す。	I
2	悠哉、**我**故郷。	悠(カナル)　哉、**我**(ガ) 故郷。	悠(はる)かなるかな、**我が**故郷。	m y
3	人愛**我。**	人(ハ) 愛(ス)レ **我**(ヲ)	人（は）**我を**愛す。	m e
4	人與書於**我。**	人(ハ) 與(ウ)二 書(ヲ) 於**我**(ニ)一	人（は）書を**我に**與(あた)う。	m e

中国語の「我」は、１は主語、２は連体修飾語、３は目的語、４は補語、と文法的なはたらきをそれぞれ異にするが、「わたし」を表す単語「我」の形はブロックのように変化しない。「私は」なのか、「私の」なのか、「私を」なのか、「私に」なのか、という文法的な意味を決定するのは、その語の置かれた位置、つまり他の語との位置関係・語順である。日本語が「は、が（の）、を、に」といった助詞で、また英語がＩ・ｍｙ・ｍｅ・ｍｅといった格変化で、文法的な意味を表わすのと大きく異なる。漢字は確かに１字＝１語ではあるが、いま見たように、漢字１字だけ取り出しても意味は確定できない。よって他の字との関係性の中において見なければならないのである。

二字熟語　このような「他の字との関係性」のもっとも単純な形が二字の熟語である。ここでも一つ具体例を挙げて説明する。「白」は小学校 1 年生で学ぶ誰もが知る漢字であるが、先に漢字の多義性に触れたように、この「白」も基本義の **①しろ** のほかに、**②しろし**（しろい）、**③あきらかなり**（あきらかだ）、**④しらげる**(白くする)、**⑤まうす**（もうす）、**⑥むなし**（むなしい）、などの意味をもつ。しかし「白」１字だけでは多数あるうちのどの意味か決められない。多義から意味を絞る手がかりがないからである。しかし他の文字と関係をもつことで意味は絞られる。

１．黒白（黒と白と）　　２．白衣（白き衣）　　３．明白（明=白らかなり）

４．漂白（漂し白げる）　　５．　敬白（敬しみ白す）　　６．空白（空で白し）

１は「黒色」との並列なので「白色」に絞れる。２は「衣服」を修飾しているので形容語「白い」、３は「明らか」と並んで同等の形容語「白らか」と見当がつく。４は「漂し」て「白げる」と並列の用法、５は連用修飾語「敬しみ」をうけて述語「白す」、６は３と同じく「空」と同等の形容語「白し」である。

このように、漢字１字では多義を絞る手掛かりがなくて不安定であったものが、他の字と結合することでそれとの関係性から意味を安定させることができる。二字熟語は、多義に揺れる不安定な漢字を、最も単純かつ簡単に安定させられる形態なのである。譬えて言えば、原子の状態では不安定な酸素Oが、原子の 2 つ結合した酸素分子O_2になれば安定する、という化学結合を思い起こせばイメージが湧くのではないか。

漢文訓読と国語の特質　ここで漢文訓読を通して見る国語の特性について一つ言い添えたい。漢文訓読とは、中国語で書かれた文に訓点（返り点、送り仮名）を施して日本語に翻訳する翻訳方法である。これを中国語と日本語との言語特性から捉えると、孤立語の中国語には無く、膠着語の日本語には必要不可欠な〈活用語尾の変化〉や〈助詞〉を「送り仮名」で補完し、「返り点」で中国語の語順を日本語の標準的な語順に修整する作業といえる[26]。漢文訓読は、言語的に異質な中国語を訓点というごく単純な記号を施すことで日本語に変換するという、文化史的にも大きな意義をもつ発明である。新『指導要領』では、中学第一学年の〔事項〕で「文語のきまりや訓読の仕方」を指導することになっている。返り点・送り仮名など漢文訓読の知識・技術を教える時は、言語文化・国語の特質に言及するよい機会である。あまり複雑にならないように、たとえば次のように注意を喚起すればどうだろうか。「もとの漢文（中国語）は語順の大切な言葉、対して日本語は助詞や動詞・助動詞・形容詞などの活用変化が大切な言葉、だから漢文を国語に変換するには、漢文にはなく、しかし国語には必要不可欠な助詞や活用語尾を補い、また国語のふつうの語順に修整する。そうして初めて国語への翻訳が完成する。漢文という外国語の鏡に照らしてみることで、国語の特徴がよくわかる。」

２．熟語の理解と活用

熟語の構成　二字熟語は、多義の漢字の意味を安定させる最も単純な形態であったが、その熟語を構成する２つの字がどのような関係で結びついているかによって幾つかの類型に分けることができる。例えば次のとおりである。

①主語―述語の関係（…が～する）：**例**　地震・国立・日没

②修飾―被修飾の関係

Ａ連体修飾（…のような～　下が体言）：**例**　洋画・和室・晴天

Ｂ連用修飾（…のように～する　下が用言）：**例**　速攻・泥睡・未定（**まだ**定まらない）

③述語―客語の関係

A目的語（…を～する）：**例**　握手・読書・謝罪・有罪（罪をもつ）・無心（心をもたない）

B補語（…に～する）：**例**　着席・登山・報恩

④並列（…と～と）

A類義：**例**　（名詞性）岩石・森林、（形容詞性）優美・富貴、（動詞性）遮断・調査

B対義：**例**　（名詞性）本末・天地、（形容詞性）高低・貧富、（動詞性）売買・攻防

⑤その他[27]：【接尾語】～性、～化、～的、～然など　【連綿語】洋洋、恍惚、徘徊など

これら熟語における字と字との関係（熟語の構成）による類型は、基本的に文における語・語群の関係による類型（文型）と重なりあう。すなわち、二字熟語は文型の最もシンプルな形態といえる。よって、熟語における個々の漢字の字義と関係に注目し、それに訓点を施したものを訓読する（また自ら訓点を施して訓読してみる）という訓練は、まとまった文章を読む前の入門期にふさわしい漢文訓読の学習法といえよう。その際できるだけ字音ではなく、漢和辞典を引いて字訓を当てるような学習を行えば、個々の漢字の字義が明確となり、さらに逐字的に読むことにより熟語の理解が深まることにもなる。〈漢文訓読の練習〉と〈漢字・熟語の訓義の理解〉と一挙両得の学習法である。

もっとも授業中に辞書を引いて字訓・構造を調べることは時間的に厳しいから、主な作業は自宅での課題となろう。中学生には教育漢字 1006 字を中心に漢字を選び、字義ごとに二字熟語を挙げて訓読させる。特に常用漢字表にない訓（表外訓）は、既習の漢字ながら知らないことなので、生徒も意外性を感じて面白がるのではないか。

ただ、漢字の知識が不足しているために熟語がどのような構成になっているかの見当がつけられない生徒に対して、この学習方法を自学自習に任せるには無理がある。というのは一般の漢和辞典には親字の複数の意味は列挙されているが、ある熟語においてその字がどの意味で用いられているか、また字と字とが上記のどの関係で結びついているか、については示していないからである[28]。習熟すれば大体の見当はつくが、初学者には雲をつかむような話であろう。

そこで参考になるのが、小学生向けの漢字辞典である。小学生向けの辞典は親字・熟語の収録数は少ないけれども、中高生・一般向けの漢和辞典にはない工夫がいろいろとされている。熟語の構成の表示もその一つである。例えば、尾上兼英『旺文社小学漢字辞典』（旺文社、1987 年初版、2011 年重版）は熟語の説明の末尾に、親字の字義を区別する㊀ ㊁ ㊂……という記号をつけて熟語中の親字の字義を示し、また次の記号で熟語の構成を表示している（原文は縦組み）[29]。

→　上の字の意味が下の字の意味にかかるもの。

←　下の字が上の字に「…に」「…を」の関係でつながるものや、上に「不・否・無・非」がついて下の字の意味を打ち消すもの。

＝　同じ字や意味の似た字を重ねたもの、関連した意味の字を組み合わせたもの。

↔　反対・対立する字を組み合わせたもの。

－　上の字が主語で下の字が述語の関係になっているもの。

＊　「然・的・子・却」などの漢字が下につく熟語や、なりたちがはっきりしない熟語。

例えば「号」字の場合、親字の字義欄に 一さけぶ、二さしず、三しるし・あいず と意味が分けて示され、熟語の説明の末尾には 号泣〈一→〉 号砲〈三→〉 号令〈二＝〉 などと記号が付される。「号泣」の「号」は 一の「さけぶ」の意味で、「号ぶ」の意味が下の字「泣く」に「号び泣く」というようにかかる、ということを示している。同様に、「号砲」の「号」は 三の「しるし・あいず」の意味で、やはり上から下にかかって「号にうつ砲」の意味、「号令」の「号」は 二の「さしず」の意味で、「号」「令」とも「さしず、いいつけ」といった類義語である、ということを示す。熟語の構成の厳密な判断には、訓詁学・語彙史の専門知識にもとづく検討を要するが、常識的なレベルでの理解には十分に役立つ。このような辞書を参考にして、自宅学習用の課題に熟語の構成を示す記号を付せば、それに基づいて訓読することが可能になろう。

ワークシート「隠れ訓さがし」　下に掲げたワークシートは、教育漢字を対象に〈熟語の構成〉と〈熟語を構成する字の和訓〉とを認識させる教材の素案である[30]。「音読み」「訓読み」欄のゴチック体は常用漢字表にある音訓を示し、予め記入してある。生徒は、熟語を手がかりに漢和辞典を引いて**「訓読み」の空欄**に表外訓（ここでは「隠れ訓」と呼ぶ）を書きこみ、さらに〈調べた字訓〉および熟語の後ろに付した〈熟語の構成を示す記号（→←など）〉にもとづいて熟語を訓読して**（訓読：　　）欄**に書き記す。枠付き部分が生徒の記入箇所である。文字・熟語の選定や使用方法など検討すべき点は多々あるが、既習字の復習も兼ねて少しずつ作業を課し、できた箇所を繰り返し読むなどすれば、漢和辞典を引く習慣が身につき漢字の知識も深く確かなものとなろう。

ワークシート 隠れ訓さがし――隠れた訓読みを漢和辞典でみつけだそう――

教育漢字	音読み	訓読み（常用訓は記入済）	熟語（訓読）
愛	**アイ**	いつく - しむ	愛情→（**訓読：** 愛(いつく) しむ 情(こころ)　）
			愛国←（**訓読：** 国を 愛(いつく) しむ　）
悪	**アク**	**わる - い**	悪漢→（**訓読：** 悪(わる)い 漢(おとこ)　）
	オ	にく - む	嫌悪＝（**訓読：** 嫌(きら)い 悪(にく)む　）
圧	**アツ**	お - す	圧力→（**訓読：** 圧(お)す 力(ちから)　）
			威圧→（**訓読：** 威(おど)し 圧(お)す　）
安	**アン**	**やす - らか**	安息→（**訓読：** 安らかに 息(いこ)う　）
		やす - い	安易＝（**訓読：** 安(やす)く 易(やす)い＝たやすい　）
			安価→（**訓読：** 安(やす)い 価(あたい)　）
案	**アン**	かんが - える	案外→（**訓読：** 案(かんが)えの 外(ほか)　）
			答案→（**訓読：** 答(こた)えについての 案(かんが)え　）

連文とその利用[31]既に述べたように、漢字は 1 字では多義性ゆえに不安定だが、他の字と

関連をもつことで意味が安定する。二字熟語はその最も単純かつ簡単な形態であるが、中でも結びつきが緊密なのが、先の 14 頁に挙げた類型の「④並列、A類義」に属する「連文」である。「連文」とは、多義をもつ漢字どうしが共通の 1 義を接点に結びつくことで、多義を 1 義に限定して明確にするという働きをもつ熟語である。①主語―述語、②修飾語―被修飾語、③述語―客語などの構成は、文型をごくシンプルにした形態であるから、表現したい事柄によって自在に組み合わせを換えられる。例えば、国が立てれば「国立」、民間が立てれば「私立」。善い人は「善人」、悪い人は「悪人」。書物を読めば「読書」、話し手の唇を読めば「読唇」、と結びつきは緩い。しかし、連文はこれらとはでき方が違う。連文は、多義を 1 義に限定するために意図して共通義をもつ字どうしを結合させ、字義を固定する。意図的であるから結合は堅固である。いわば「熟語の中の熟語」である。

この連文の知識は漢文訓読に応用できる。たとえば「愛惜」という熟語がある。これは連文で、「愛」も「惜」も「おしむ」という共通義で結びつく。よって「愛」も「惜」と同じく「おしむ」と訓読みできるわけである。「惜＝おしむ」は常用訓であるから読めない者はないが、「愛」を「おしむ」と訓(よ)むのは難しい。「愛惜」という連文がその手掛かりを作ってくれるのである。

具体例を挙げてみる。「忠臣不**愛死**以成名」（『戦国策』趙策一）、これは主人の仇討に命をかけた豫讓(よじょう)という刺客の言葉である。いちおう「忠臣は死を愛(あい)さず以て名を成す」と訓読してみたところで、誰も好き好んで死ぬものはないから「死を愛さず」とは言わずもがなである。ここは「死をもいとわず忠義の名を後世に残す」の意と思われるから、そこから見当をつけ「愛惜」を想起できれば「死を愛(お)しまず」と訓める。もう一例挙げると、「花**発**多風雨、人生**足**別離」はどうだろうか。これは井伏鱒二訳の「ハナニアラシノタトヘモアルゾ、『サヨナラ』ダケガ人生ダ」で知られる于武陵「勧酒」の一節だが、これをどう訓読するか。「花**発**」は「花発(はっ)して」と音読みすれば一応は読めた気になるが、「では『発する』とはどういうことか」と問われると、答えに窮しないだろうか。そこでもし連文の利用に頭が働いて「開発」を思いつけば、「開＝発」で「花発(ひら)きて」と訓める。また「**足**別離」はふつう「別離に足(た)る」と読み慣らわされているが、ここも「満足」という連文を思いつければ、「足」を「多く満ちあふれている」という意味として「人生別離に足(み)つ」という方向で解釈できるだろう。「花発(ひら)く」「別離に足(み)つ」という方がイメージを鮮明に捉えられるのではないか。

このように連文の利用は漢文訓読に有用な知識であるが、その利用には当該の文脈におおよその見当をつけなければならない。見当をつけた上で連文を思い起こし、その箇所に適した訓を当てるのである。文意・文脈を読むことなく、行き当たりばったりに思いつく熟語を当てて読めば、とんでもなく独善的な解釈になってしまう。これは漢文読解に限らないが、「全体の文意・文脈をしっかり捉える」という基本を強調し、その上でこそ連文の利用も活きてくるとの指示が必要である。

結び

国語は漢字との接触によって、漢語を国語の中に取り入れて音読する一方で、漢字に和語を当てて直接読む訓読みを発達させた。訓読みは漢字と和語との関係を密接にし、国語表現にお

いて漢字を不可欠なものとして定着させた。また漢文訓読は大陸の知識・技術を摂取するのに極めて効率的に漢文を和文に翻訳する方法として発達した。国語と漢字とはこのような長期にわたる密接な関係をもって今日に至っている。漢字・漢文を学ぶ意義は、それ自体への理解を深めることは当然であるが、同時に国語とは異質の漢字・漢文に関わる知識を得て、それを比較対照の鏡として我が国の言語文化や国語の特質を客観的に捉えるという面も重要である。漢字・漢文の学習は、それを不可欠な要素としている国語を内に深く理解すること、そして国語とは異質な外国語として外から国語の特質を照らし出すこと、この内外両面の意義をもつものと言える。

漢和辞典は一冊に形・音・義にわたる諸情報が盛り込まれた漢字情報の宝庫である。しかし、それも活用しなければ宝の持ち腐れである。自戒を込めて言うが、教育現場では漢和辞典を有効活用する指導への関心が低かったのではないか。この多くの漢字情報を活用するにはどのような指導の観点があり、どのような説明や教材が有効か、字形・字音・字義について今のところ考えつくことをまとめてみたのが前稿と本稿である。これからの授業実践につれて、後日また修正や追加が必要になろうが、現時点での考えとして書きとめた。先ずはこの方向に沿って教材の開発や授業での実践を図ってゆきたい。

1　古代中国において、ことばは漢字以前に当然、音声によって伝えられてきたから、その音声を手がかりに語源を明らかにしようという立場がある。藤堂明保『漢字語源辞典』（学灯社、1963 年）の「単語家族説」がよく知られている。この学説は復元された上古漢語における語形をとらえて、数多くの漢語を分類し帰納法を用いてその基本義（本義）を明らかにするという言語学的研究方法をとる。研究の成果が藤堂氏監修『学研新漢和大字典』（学研、1978 年初版）、『漢字源』（学研、1988 年初版）に盛り込まれているが、たいへん興味深い説である。ただ、ことばの音は時代・地域によって大きく変化する上、上古音は周・秦（前 8~前 3 世紀）の音で、殷代まで遡ることができない。落合淳思「甲骨学からみた字源研究」（『日本語学』vol. 30-12、2011 年 10 月）が、新しい字音から古い語源を分析することができるのかと指摘するように、音声による語源研究は慎重を要するものと考える。ここでは、音声によって表されたことばの語源ではなく、漢字が表すことばの本来的な意味＝字源について述べるにとどめる。

2　拙稿「中学校・高等学校国語科教育における漢和辞典活用の指導法（字形・字音）―新学習指導要領「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の観点から―」（『四天王寺大学紀要』第 54 号、2012 年 9 月）242 頁を参照。

3　六書のうち用字の原理である転注・仮借が、ここにいう転義の原理＝引伸・仮借であるとする説はかなり一般的で、例えば湯浅廉孫『漢文解釋における連文の利用』（文求堂、昭和 16〈1941〉年。のち朋友書店、昭和 55〈1980〉年）第三章「字義ト字訓ト訓詁」、武内義雄『支那學研究法』（岩波書店、昭和 24〈1949〉年）第二「文字学」第三章「文字の意義」などに見える。確かにこう考えると、六書の造字・用字の原理と、本義・転義の原理とが符合してわかりやすい。しかし、六書の転注には諸説あり、転注＝引伸とするには慎重を要す。ここでは転注＝引伸とする説がひろく行われていることを注記するにとどめる。なお、段玉裁の「『説文解字』は象形指事会意諧声の書なり。『爾雅』『広雅』『方言』『釈明』は転注仮借の書なり。」（「六書音均表三」）を踏んで、武内氏は「本義の説明を試みた最初の字書は『説文』であつて、轉義を説明した最初の字書は『爾雅』であり『爾雅』をつぐのもに『廣雅』『方

言』などがある」（同上、128 頁）と辞書史と関連させて指摘している。

4 本義の説明は『説文解字』、藤堂明保『漢字源』、白川静『字通』などに拠り、本義から転義の派生の説明は、上記のほか段玉裁(1735～1815)の注の記述を参考にした。

5 同音・同義ながら字形の異なる字は「異体の関係にある」という。例えば、體・体・躰・體の四字は相互に異体字である。いっぽう国家などの権威に標準と認められた字体を正字という（正字体・正体・正体字とも）。上の例でいえば、当用漢字字体表の公布（1949 年）以前は『康熙字典（こうきじてん）』に載せる體が正字、以後は体が正字である。

6 現代中国音では、A「やさしい」・B「かえる」ともに「yì」で同じ発音になっているが、かつては、Aは去声、Bは入声で発音は異なった。漢和辞典の韻目の違いで確認できる。

7 戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編『全訳漢辞海』（三省堂、2000 年初版）を用いた。

8 日本の近代的な漢和辞典の嚆矢である重野安繹・三島毅・服部宇之吉『漢和大字典』（三省堂、明治 36〈1903〉年）の例言に「其の字の有する異義に從ひ、項を分かちて訓釋する場合には、原義を前にし轉義を後にし、㊀㊁㊂の順に之を排列せり。」とし、すでに原義から転義の順としている。基本的にこの排列の原理をとるものは以下のとおりである。頭に㊥を付したのは中学生以上を対象とするもの、それ以外は高校生以上一般向けのものである。なお、排列の原理を凡例で明示しないものは挙げなかった。

㊥藤堂明保・加納善光『学研 現代標準漢和辞典』（学研、2001 年初版、2010 年 13 刷）
㊥山田俊雄・戸川芳郎・影山輝国『例解新漢和辞典』（三省堂、1998 年初版、2010 年第 3 版 13 刷）
小川環樹・西田太一郎・赤塚忠『新字源』（角川書店、昭和 43 年初版）
吉田賢抗『新釈漢和辞典』（明治書院、昭和 44 年初版、平成 10 年新訂版 13 版）
藤堂明保・松本昭・竹田晃・加納喜光『漢字源』（学研、1998 年初版、2011 年第 5 版）
戸川芳郎・佐藤進・濱口富士雄『全訳漢字海』（三省堂、2000 年初版、2011 年第 3 版）
白川静『字通』（平凡社、1996 年初版）
影山輝国・伊藤文夫・山田俊雄・戸川芳郎『新明解現代漢和辞典』（三省堂、2012 年初版）
林大『現代漢語例解辞典』（小学館、1992 年初版、2010 年第 2 版第 6 刷）

このほかに、別の考え方で排列したものもある。例えば、

1.長澤規矩也・原田種成・戸川芳郎『新明解漢和辞典』（三省堂、1974 年初版、1986 年第 3 版）
2.㊥加納善光『学研ビジュアル版 全訳用例漢和辞典』（学研、2003 年初版、2010 年第 5 刷）
3.㊥小林信明『新選漢和辞典』（小学館、1963 年初版、2011 第 8 版）

1 は「使用度の多い一般的なものから特殊なものへ」の順。また、**2** は「適宜使いやすいように」という順である。**3** は「意味欄は主として多く使われる意味・用法の順」であるが、50 字を選んで、漢字の原義から派生義が生まれる流れがわかるように図示し、意味欄との対照により、漢字の多面的な理解が図れるよう工夫されている。

9 小西甚一『古文の読解』（旺文社、昭和 37 年。のち講談社〈学術文庫〉、2010 年）第 4 章「むかしの言い方　―その 1 ヴォキャブラリー」を参照。

10 前掲注 2 拙稿（2012 年 9 月）244 頁に所載の図「中国語の音節構造」を参照。

11 古田島洋介・湯城吉信『漢文訓読入門』（明治書院、2011 年）に拠った。下記の図式・説明も同書に基づく。

12 高島俊男『漢字と日本人』（文藝春秋〈文春新書〉、平成 13 年）第一章 64 頁の以下の説明が明快である。「日本では、中国からわたってきた文字がそれぞれに持っている音を「字音」と言う。（中略）そ

れらは本来みな、一つ一つの単語なのである。ただそれが日本へくると、日本語の音の種類がすくなくて本来ことなった音がおなじ音になってしまうことや、本来一つ一つのことばがみな持っている声調が日本では無視され消えてしまうことなどから、意味を失ったただの「音」になってしまうのだ。（中略）生、静、整、西、省、成、性、青、星、政、制、盛、……、（中略）日本では、みなひとしなみに「セイ」になる。そうすると「セイ」はあんまり守備範囲がひろすぎてもはや意味を持ち得ず、単なる「音」になってしまう。」

13 実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版、1981 年）によると、近代に日本人が新たに造語した漢字語彙に次のようなものがある。

化学　心理　民主　材料　希望　服従　記録　倫理　歴史　権利
人為的（～的）　人格化（～化）　強度（～度）　積極性（～性）　人生観（～観）
唯物論（～論）　生産率（～率）　小説界（～界）　哲学問題（～問題）
反体制（反～）　超古典主義（超～）

上段の「化学～権利」については、中国人もそれが日本人による造語と意識しないほど自然に中国語に根付いた語彙という。また二段目以下の「～的、～化、～度、～性、～観」「反～、超～」といった接尾語・接頭語も日本人による造語で、今ではこれらもすっかり現代中国語に浸透している。当時の日本人の漢字運用能力が、西洋の政治・経済・科学の知識の摂取に果たした役割の大きさ、さらにそれが中国の近代化にも貢献したことが見て取れる。

14 笹原宏之『訓読みのはなし―漢字文化圏の中の日本語―』（光文社〈光文社新書〉、2008 年）第一章「訓読みの歴史」、大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』（放送大学教育振興会、2009 年）第 12 章「韓国・朝鮮の漢字」を参照。

15 結果として同音異義語が多くなる理屈であるが、実際は音韻構造が比較的複雑であることや、2 字以上の漢字を組合わせて熟語化して字義の判別や音声の多様化を図ることで混同をさけることが可能となっている（第三章「熟語」二字熟語を参照）。

16 『爾雅』については、前掲注 2 拙稿（2012 年 9 月）249 頁の注 8 を参照。

17 例に挙げた同訓異字の説明は、中学生向けの新田大作・福井文雅『ベネッセ新修漢和辞典』（ベネッセコーポレーション、1991 年初版、2010 年初版 7 刷）の本編、「思」字の説明に設けられた「同訓異字」欄から抜粋した。

近代の漢和辞典で「同訓異義」に注意したのが『大字典』（講談社、大正 6〈1917〉年初版）で、その凡例に「一、漢字には、訓を同じうして文字を異にせるものあり。其別を知ること最も大切なれば、訓義の解説の後に、更に同訓異義の欄を設けて、之を説明したり。／一、同訓異義の解説は、古來伊藤東涯の操觚字訣を以つて第一となすが故に、成るべく原文の儘に之を採錄して、妄りに變改を加へざりしは、又編者の意の存する所なり。」本書は国語における漢字の用法に意を用いた辞書で、日本の古辞書から努めて和訓を採集するほか、同訓異字の説明にも意を用いた。それに音訓索引による引き易さや、充実した親字・熟語も加わり、50 数年におよぶロングセラーとなった。1993 年に改定された『新大字典』にもその特色が受け継がれている。

また、白川静『字訓』（平凡社、1987 年初版、2005 年新訂版）は、和訓とそれに該当する漢字との関係を明らかにする意図で著された書である。その成果は、同氏『字通』（平凡社、1996 年初版）附録の「同訓異字」欄にまとめられている。なお、白川静の字書三部作―『字統』『字訓』『字通』の著述意図・内容・特色などについて、『入門講座白川静の世界 I 文字』（平凡社、2010 年 9 月）第三部に、笠川直樹、杉山一也、滝野邦雄の諸氏によって平易に解説されている。

小型辞書では、影山輝国・伊藤文夫・山田俊雄・戸川芳郎『新明解現代漢和辞典』（三省堂、2012 年初版）が特に古訓欄を設け、中古・中世・近世にわけて古訓を列挙しており、手軽で便利である。

[18] 佐藤喜代治代表編集『漢字百科大事典』（明治書院、平成 8〈1996〉年）を参照。

[19] 国字については前掲注 2 拙稿（2012 年 9 月）237 頁、慣用音については同 247 頁を参照。

[20] 特に漢字の日本的な用法に意を用いているのが、中学生向けでは、山田俊雄・戸川芳郎・影山輝国『例解新漢和辞典』（三省堂、2010 年第 3 版 13 刷）、高校生以上一般向けでは、影山輝国・伊藤文夫・山田俊雄・戸川芳郎『新明解現代漢和辞典』（三省堂、2012 年初版）である。

[21] 『改定常用漢字表』は、本文のほか、基本的な考え方を説明した解説や改定の要点を含めてインターネット上の文化庁ＨＰで見ることができる。

[22] 佐々木勇「日本漢音研究の現在」、佐藤進「日本語における音読みについて」（ともに『日本語学』vol. 30-3〈特集：漢字音研究の現在〉、明治書院、2012 年 3 月号）に基づく。

[23] 中学校および高等学校の新『指導要領』における〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕のウ「漢字に関する事項」を以下に抜粋する。

【中学校〔第１学年〕】

ウ（ｱ）…学年別漢字配当表に示されている漢字に加え、その他の常用漢字のうち 250 字程度から 300 字程度までの漢字を読むこと。

（ｲ）学年別漢字配当表の漢字のうち 900 字程度の漢字を書き、文や文章の中で使うこと。

【中学校〔第２学年〕】

ウ（ｱ）第 1 学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字のうち 300 字程度から 350 字程度までの漢字を読むこと。

（ｲ）学年別漢字配当表に示されている漢字を書き、文や文章の中で使うこと。

【中学校〔第３学年〕】

ウ（ｱ）第 2 学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字の大体を読むこと。

（ｲ）学年別漢字配当表に示されている漢字について，文や文章の中で使い慣れること。

【高等学校〔国語総合〕（１）】

ウ（ｱ）常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字が書けるようになること。

[24] この表に取った訓は、注 17 に引いた『大字典』『字通』のほか、佐藤喜代治『字義字訓辞典』（角川書店〈角川小辞典 4〉、昭和 60〈1985〉年）を参考に古辞書の古訓を選び、必要に応じて（）にその現代語を記した。

[25] 参考までに手元にある、中学生以上向け、高校生以上・一般向けの小型の漢和辞典について、「まえがき」「凡例」等によって親字数および熟語数を挙げておく（明示されない場合は、未詳とした）。各辞典の親字・熟語の数は、かなりの幅をもちながらも、それぞれの対象に応じて設定された規模の目安というものが察せられよう。念のために付言するが、各辞典には特長があり、親字・熟語の多寡が優劣の差というものではない。

【中学生以上向け】

1. 沖森卓也『三省堂 五十音引き漢和辞典』（三省堂、2005 年初版第 2 刷）
   親字：6,300 字　　熟語：30,000 語
2. 新田大作・福井文雅『ベネッセ新修漢和辞典』（ベネッセコーポレーション、2010 年初版 7 刷）
   親字：4,600 字　　熟語：28,000 語
3. 藤堂明保・加納善光『学研 現代標準漢和辞典』（学研、2010 年初版 13 刷）

親字：3,700 字　　熟語：28,000 語

4. 加納善光『学研ビジュアル版全訳用例漢和辞典』（学研、2010 年初版第 5 刷）

親字：8,800 字　　熟語：20,000 語。

5. 山田俊雄・戸川芳郎・影山輝国『例解新漢和辞典』（三省堂、2010 年第 3 版 13 刷）

親字：7,000 字　　熟語：35,500 語

6. 小林信明『新選漢和辞典』（小学館、2011 年第 8 版）

親字：15,500 字　　熟語：64,000 語

【高校生以上・一般向け】

1. 吉田賢抗『新釈漢和辞典』（小学館、1998 年新訂版第 13 版）

親字：6,600 字　　熟語：36,000 語

2. 林大『現代漢語例解辞典』（小学館、2010 年第 2 版 6 刷）

親字：9,700 字　　熟語：50,000 語

3. 小和田顕・遠藤哲夫・伊藤倫厚・宇野茂彦・大島晃『漢字典』（旺文社、2010 年第 2 版重版）

親字：10,100 字　　熟語：46，000 語

4. 戸川芳郎・佐藤進・濱口富士雄『全訳漢字海』（三省堂、2011 年第 3 版 1 刷）

親字：12,500 字　　熟語：80,000 語

5. 藤堂・松本昭・竹田晃・加納『漢字源』（学研、2011 年第 5 版）

親字：17，000 字　　熟語：88,000 語

6. 鎌田正・米山寅太郎『新漢語林』（大修館、2011 年第 2 版 1 刷）

親字：14,313 字　　熟語：50,000 語

7. 影山輝国・伊藤文夫・山田俊雄・戸川芳郎『新明解現代漢和辞典』（三省堂、2012 年初版）

親字：10,700 字　　熟語：54,000 語

[26] 「標準的な語順」と記したのは、日本語において語順は文法的な意味を決定する要件とは言えないからである。修整された語順はあくまで標準的な語順であって、それから外れても、文法的な意味を決める助詞が明示されていれば意味は変わらない。「私は君を愛しています」が標準ではあるが、「君を私は愛しています」でも、「君を愛しています私は」でも、「愛しています君を私は」でも、不自然ながら意味は通る。

[27] 熟語の構成には様々な分類方法がある。教科書によっても採用する分類法は異なり、「不・未・再」や「化・的・性」を接頭語・接尾語として別に類型を立てるものもある。ただ概説は細かく網羅的にならない方がよいし、ここでは熟語を漢文訓読のように読んでみることが目的であるので、分類を簡略化し、「不～、未～、再～」等は②‐B「連用修飾語―修飾語（用言）」の関係に含め、「～化、～的、～性、～然」については⑤「その他」に含めた。

[28] 林大『現代漢語例解辞典』（小学館）は、熟語を頭の字の字義ごとに分類して排列している。例えば、「好」字の場合、①このむ。すく。このみ。：好悪、好学、好奇、好古、好尚……。②よい。よろしい。：好意、好音、好運、好客、好下物……。③したしい。よしみ。つきあい。好誼。という排列である。ただし「好悪＝好き（す）悪い（きらい）」「好学＝学を好む」「好意＝好い（よ）意（きもち）」などの熟語の構成は示していない。

[29] ほかに林四郎・大村はま『例解小学漢字辞典』（三省堂、2011 年第 4 版）も、熟語が親字の字義別になっているところは異なるが、記号で熟語の構成を表示する工夫は同じである。

[30] 2012 年 2 月、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が行った「漢字教育サポーター育成講座」の

うち筆者は「漢字学総論Ⅰ」を担当した。講座の終了後、受講者からレポートの提出があり、そのうち中西博史氏のレポート「もっと漢和辞典を使ってみよう―熟語を訓読して常用漢字の『隠れ訓』探し」は、筆者の構想に沿いよく考えられたものであった。このワークシートはそれをもとに手を加えたものである。漢文の訓点を付す場合は、縦書きが望ましい。

[31] 連文およびその利用については、二畳庵主人『漢文法基礎』（増進会、昭和 52〈1977〉年、のち講談社より二畳庵主人／加地伸行『漢文法基礎―本当にわかる漢文入門』2010 年）第二部基礎編「連文・互文」が、初学者向けに平易明快に説明している。専門書としては湯浅廉孫『漢文解釈における連文の利用』（文求堂、昭和 16〈1941〉年、のち朋友書店〈朋友学術叢書〉、昭和 55〈1980〉年）があるが、文体は漢文訓読体、記述内容も専門的で一般には難解である。